

スミレ

堇^{すみれ} スミレ科

野に咲く花のシテイライフ

山路^{やまじ}来て何やらゆかし堇草^{すみれぐさ}（『野ざらし紀行』）

松尾芭蕉の句に詠まれるように、スミレは山道のやや明るいところによく生えている。しかし、山野に咲くイメージが強いスミレも、気をつけてみるとコンクリートの割れ目や石垣の隙間など、街のなかでも見ることができる。

スミレの種子には「エライオソーム」というゼリー状の物質が付着している。この物質はアリの好物で、お菓子の「おまけ」のような役割を果たしている。子どもたちが「おまけ」欲しさにお菓子を衝動買いしてしまうように、アリもまたエライオソームを餌とするために種子を自分の巣に持ち帰るのだ。このアリの行動によってスミレの種子は遠くへ運ばれるのである。

しかし、アリの巣は地面の下にある。地中深くへと持ち運ばれたスミレは芽を出すことができないのだろうか。もちろん心配はご無用。これも計算のうちである。



アリがエライオソームを食べ終わると、種子が残る。種子はアリにとっては食べられないゴミなので、巣の外へ捨ててしまふのだ。このアリの行動によってスミレの種子はみごとに散布されるのである。

アリの巣は必ず土のある場所にある。街のなかではアリの巣の出入口はアスファルトやコンクリートの隙間をうまく利用している。野の花のイメージが強いスミレが街の片隅のコンクリートの隙間や石垣に生えているのは、わずかな土を選んでアリの種を播いてもらっているからにはかならない。そのうえ、アリのごみ捨て場所には、ほかにも植物の食べかすなども捨てられているから、水分も栄養分も豊富に保たれているという特典つきである。

スミレは花にも驚くべき秘密がある。スミレの花をよく見ると、花を長くして後ろへ突き出た形になっている。この突き出ているのが「距」と呼ばれる部分である。距は蜜の容れ物になっている。茎は前方の花の部分と後方の距の真ん中についていて、やじろべえのようにバランスをとっている。花を長くするために、中央でバランスをとるような構造になっているのである。

そうまでして花を長くしたのは理由がある。花にはさまざまな虫が訪れる。花粉を運んでくれる虫もいれば、花粉を運ばずに蜜だけを盗んでいく虫もいる。スミレは玉石

混淆の虫のなかから、真に花粉を運んでくれるパートナーを選び出さなければならぬ。そのため長い花を作り上げたのである。

『イソップ物語』の「ツルとキツネ」では、ツルがごちそうした長い筒状の容器では、キツネはスープを飲むことができなかった。代わりにキツネがごちそうした平たい容器では、ツルはスープを飲むことができなかった。スミレの花粉を運んでくれるのは、舌を長く伸ばすことのできるハナバチの仲間である。だから、ツルの話と同じように長い筒状の容器を用意すればいい。これがスミレの花が長くなった理由である。

花のなかをのぞいてみると、雌しべのまわりには膜があつて、ちようと片手で水をすくうときのような形になっている。片手の中指の部分が雌しべになっていて、雌しべと膜とで花粉を入れる容れ物となるのだ。そして、雄しべは花粉をこの容れ物のなかにすべて落として入れてしまうのである。

これで準備は整った。ハナバチが訪れて、花のなかに頭を突っ込むと、五本の指から中指が離れるように雌しべの部分がずれて容れ物に隙間ができる。そして、花粉がこぼれ落ちてハナバチの頭に降り注ぐのである。忍者屋敷のしかけを連想させるような何とも手の込んだ構造になっている。

しかし、こんなに用意周到に準備して待っていても、春を過ぎるとハナバチはすつか

り訪れなくなってしまう。そのころになるとスマイレはつぼみ（蕾）のまま、花を咲かせなくなる。別にふててしまったわけではない。つぼみのなかで雄しべが雌しべに直接ついて、受粉してしまうのである。開くことなく種子をつけるこの花は「閉鎖花」と呼ばれている。閉鎖花は最初から咲く気がないのである。

たしかに、自分の花粉をつけるよりも他の花から運んでもらった花粉をつけるほうがいい。そのほうが、さまざまな遺伝子を持つ子孫を残すことができるからである。しかし、それはハナバチが訪れてくれればの話である。いくら理想を語っても種子が残せなければ意味がない。そこで次善の策として自分の花粉で受精するのである。

この閉鎖花にもメリットはある。

一つは虫まかせな方法に比べて、確実に種子を残すことができる。さらに季節にも左右されないの、ハナバチが訪れなくなった夏から秋まで種子の生産が可能である。もう一つは、コスト削減が可能な点にある。虫を呼び寄せるための花びらも蜜も必要ない。花粉も受精に必要な最低限の量を用意すればいいのだ。

ひっそりと咲くスマイレを「ゆかしい」と評した松尾芭蕉も、もしこの花のしたたかさを知ったなら、一体どう表現しただろうか。

スミレ *Viola mandshurica* (スミレ科 スミレ属)

スミレは北海道から九州までの地域に広く分布し、人里に生育するスミレとしてなじみ深い。芝生や路傍、堤防などに生育しており、アスファルトの割れ目にも生育することがあるなど、生育範囲は広い。春に濃紫色の花を開く。この花は花粉を媒介して種子を形成するが、それ以降の季節ではつぼみは形成するが花を開くことなく、閉じたままで種子を形成する閉鎖花を形成する。このようなスミレの繁殖戦略は、春には他花との花粉媒介を行うことによって多様な遺伝子を持った種子を形成し、それ以降は花粉を媒介せず、効率的な種子形成を行っているわけであり、融通性の高い方法であると考えられる。

スミレの和名については諸説あるが、「墨入れ」がなまったものであるという説は、おもしろい。墨入れは大工さんなどが木工の際に使用する道具であり、糸に墨を吸わせてピンと張り、板などに糸を打ち付けて鋸などで加工する際の直線を描く道具である。この墨壺と糸巻きを組み合わせたような形が、花を横から見た姿にそっくりであるというわけなのだが、墨入れを見かけない昨今では、説明に苦勞する。











日本産のものはすべて[草本](#)で、河畔のヨシ群落に生息するタチスミレのように背の高くなる例外もあるが、ほとんどがごく背が低い草である。茎を地表より高く伸ばさないものが多い。葉はハート型か、それを引き伸ばしたような形をしている。

花茎の中ほどに1対の小苞がつく。花の形は基本的にはどれもほぼ似ていて、左右対称で、見ただけでスミレとわかるものである。花は5弁、そのうち1つが大きく、基部は後ろに突き出して袋状の部分(距きょ)を作る。多くは下側の大きい花びらに若干の模様が出る。

[果実](#)は蒴果(さく)で、熟すると三つに割れ、断面には種子が並んでいるのが見えるようになる。そのうちに果実が乾燥して縮み、種子は押し出されて弾け飛ぶ。

[種子](#)にはエライオソームと言われる付属物があり、これが[アリ](#)を誘引して、種子散布の助けになると考えられる。

また、[閉鎖花](#)をつけるものがよくある。高山のものは黄色い花をつけ、それ以外のものは紫、青か白系統のものが多い。

スミレの語源は昔の[大工](#)用具「墨入れ」に由来し、距を墨入れに見立てたものとしたと云う[牧野富太郎](#)の唱えた説がよく知られているが、異説もある。



スミレの花の特徴

先ず花を観察して下さい。花は細い柄(花茎)の先に1個横向きに咲いています。柄の途中には小さな葉が付いています。これを苞葉(ほうよう)といいます。

花びら(花弁)は5枚有ります。上の2枚を上弁(じょうべん)、横にある2枚を側弁(そくべん)、下の1枚を下弁といいます。

下弁には線状の飾りが付いていたり、一部色が変わっていたりします。下弁の上には雌しべや雄しべがあり、飛んできた昆虫を誘導する目印となっています。

下弁の元の方は花の後ろにふくらんでいて、ここを距(きょ)と呼びます。距がスミレの花の特徴です。花の中央には1本の雌しべがあり、そのまわりを5本の雄しべが取り囲んでいます。

スミレの蜜は花の奥にある距の中に隠されているので、上手に蜜を吸える昆虫は限られてきます。特定の昆虫にのみ蜜を提供し、体に付いた花粉を運び仲間のスミレと効率の良い花粉交換をしているのです。多くの昆虫に蜜を提供したのではスミレの蜜を吸って、次は他の植物の花に行ってしまったのでは効率が悪くなります。

浮気を出来るだけ防ぎたいのです。

ところが口が蜜に届かない蜂の仲間には後ろから距に穴を開けて蜜を盗んでしまうものもいます。自然界にも鍵をこじ開けて盗みをする泥棒がいるのですね。

花壇や鉢植えとして人気のあるパンジーはずっと花が大きくカラフルですがスミレの仲間です。見比べて下さい。

